

---

# 面倒事に巻き込まれた！！

美奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

面倒事に巻き込まれた！！

### 【Nコード】

N3942Z

### 【作者名】

美奈

### 【あらすじ】

エルシア・サマーニは少し気が強いどこにでもいるようなごく普通の少女。そんなエルシアが嫌いなものが面倒事。そんなエルシアの前に一通の手紙が届く。その一通の手紙が、エルシアの平和な日常を奪っていく。

## プロローグ（前書き）

初めまして&短編をご覧頂いた方はお久しぶりです！

連載作品を全て消し、1からこれを書いていこうと思っています。  
駄文ですがどうぞよろしく願いしますm（^ ^）m

## プロローグ

ここミフェス王国の中央に位置するファスにある一人の少女がいた。

「エルー！手紙だよ！」

「はいはい！今行くわー！」

少女はごく普通の、下町で働いているエルシア・サマーニ。

美人とは程遠い、平凡な顔立ち。どちらかというと整ってはいるが、美人と言うまでではない。

面倒な事が大嫌いな彼女は平和な日常を過ごしていた。筈だった。

平和な日常を過ごしていた彼女がこの一通の手紙で自分の人生が変わるなど思ってもみなかっただろう。

これはどこにでも居る極普通の少女とその少女の周りで、起きる出来事の話である。

「な、なにこれー！ー！！？？」

## プロローグ（後書き）

今後ともよろしくお願い致します。

1話 「不満よ!というか面倒よ!」 (前書き)

連続投稿。頑張ってます(^ ^)

## 1話 「不満よ!というか面倒よ!」

「なんなのなんなの!!」

そう言つて目の前の手紙を私は床に放り投げる。

私の名前はエルシア・サマーニ。このミフェス王国のファスに住む普通の女の子。周りからは強気だと言われる。ええ、自覚してます。ちよつと強気なことくらい。

私は面倒事が嫌い。

後々の処理が面倒だし、疲れるし、イライラもする。

私は平凡なだけあつてそれほど面倒事には慣れていない。勿論、今後も慣れるような事はない。…はず。

慣れなくても面倒事には巻き込まれるのが平凡な人の特徴。そして私は今、最も厄介な面倒事に巻き込まれようとしていた。

私が先程、床に投げ出したのは……城からの招待状。何に招待されたのか、と聞かれればこう答えるしかない。

「妃選び……」

私はそう呟いた。何故、私の様な下町の娘が選ばれるのかはわからない。ただ、前王妃様が庶民つて影響もあるのだろけど…冗談じゃない!

「何を好んで妃に何かならなきゃいけないのよ!私は平凡な生活を求めてるのに!」

私はそう言っただけ。私はその顔を拝見した事は一度もない。第一私はあまり王子というものを好きじゃない。私は性格が捻じ曲がっているのか、それとも子供の頃の出来事が原因なのかは知らないけど王族というものを嫌っている。世間的にどうかと自分でも思っているんだけど仕方ない。

「あ、そうだ！アイサにも来てるかも！」

私は友人、アイサの元へと急ぐ。アイサの家に着いた私はアイサを呼んだ。

「アイサー！」

「はい」

中からのんびりとした声が聞こえてきた。と思うと、玄関の扉が開き、アイサがひょっこりと出てきた。

「アイサ！アイサの所に招待状来た？」

「招待状？そんなの来てないよ。誰の？」

「王子の」

「…へ？」

アイサはキョトンとしていて訳がわからないように首を傾げた。私に手が握っていた手紙を広げて見せるとアイサは目を見開き私と手紙を交互に見ていた。

「よかったじゃない！エルー！！」



「何がよ！ちつとも良くないわ！何でこんな所に呼ばれなきゃいけないの！」

「何？エルーは不満なの？」

「不満よ！というか面倒よ！」

私は目の前の友人に言った。友人は『面倒』という言葉聞いて苦笑いする。私は自分が選ばれるなんてこれっぽっちも思っていない。というか思う方が可笑しい。何でこんな下町の娘を妃に選ぶのか。しかもこんな平凡の。私はただ、呼んでみただけだろう。だから別にここまで拒む必要はない。のだが。

「何で令嬢様達に罵られに行かなきゃならないのよ！」

「でもお城のお食事って豪華だよ？食べ放題だよ？」

「……」

私はアイサの言葉に反応する。豪華、食べ放題……庶民の私は贅沢が出来ない。よって城の食べ物はこちら。私にとってはとても有り難い事。

「あまりにも面倒すぎて忘れてた……よし！食べ放題——！」

「頑張ってきてねえ」

アイサがそういうのを聞いて私はアイサに向かって手を振った。つて言っても、まだなんだけどね。後、一週間。あと一週間でこちらが食べれる！！

1話 「不満よ!」というか面倒よ!」(後書き)

サブタイトル気づきましたでしょうか？

文中のエルシアの台詞からとっております。

なんというか、サブタイトルを考えるのが難しくて…

悩んで末、サブタイトルは文中から取る、ということになりました。

これからよろしく願います。

## 2話 「迷子だ…」

早くも一週間が経った。…え？何かいけなかった？だってこの一週間って特になにもなかったのよ。ええそうね。アイサに恋人がいたということを除いては。まあこの話は後にして…私は今、馬車の中にいる。なぜかって？家の前まで馬車が来たからよ…玄関の扉を開けたらそこには馬車がありました。ってなにそれ！？ものすごい迷惑よ！なにその気づかい！いらないわ！

「サマー二様。到着いたしました」

執事らしき人が私に向かってニコリと微笑む。私もニコリと微笑みながらお礼を言う。本当は微笑みたくはないのだけれど。仕方ないよ。あんまり悪印象持たれると面倒な事になる。私はその人の後についていく。そして大きな扉を開くと、様々な女性が素晴らしく自分を着飾っておりました。

（わぁー香水くさーい…）

私は内心そう思いながら、顔には出さないようにしていた。私は香水はつけない。だって臭いじゃない。何を好んであれを大量につけるか、私には全く理解できないのよ。私はそう思いながら人が少ない窓際の一角に歩いて行った。まだ第一王子は来ていないみたい。どうりで、令嬢達の間には怖い雰囲気漂っているわけよ。

「ここらへんかしら」

私はそう言っ窓の近くに立った。どうやら私の平凡顔は特に目立たないようね。誰もこちらを見ようとしないもの。私としてはこっ

ちの方が好都合。私はワクワクしながら第一王子の登場を待つ。一刻も早く第一王子に来ていただきたい。そしたらお食事が食べれるじゃない！私はワクワクしながら待っていたのだが…第一王子が時間になっても現れない。私は流石にイライラし始めたこの空気に耐え切れなくなり、部屋の外へ出た。

「はあゝ気持ちいいー」

私は部屋を出た所で肩に入っていた力を抜いた。しかし、私は初めて目にする目の前の光景に目を見開く。

「花多いっ！」

別に花が嫌いだというわけじゃない。どっちかというと好きな方だ。うん。でも。

「ここお城だよね…？」

お城の中に、一面を覆い尽くす程のお花畑があるだろうか普通。私はその光景に少し疑問を持って後ろを振り向いてみる。そこには先程、出てきた部屋の扉が存在する。うん。ここはお城だ。決してお花畑ではない。

「と、取り敢えず、移動…」

私はそう言つて右左をキョロキョロする。正直、そこに今すぐ帰る気はない。というか帰りたくもない。何を好んであんな居心地の悪い場所にいなければいけないのか。私はそう思いながら左に進んだ。左には何があるのか私は全く知らなかった。いや、庶民が知ってたらすごいです。それから私はだいぶ歩いたのだけれど…うん。正直

に言います。

「迷子だ…」

私はそう言って頭を抱えた。とうかこの年になって迷子になるとは思いませんでした。はい。私は周りをキョロキョロを見る。人の気配なし、来た道もわからない。絶望的だア…そう思っていたその時。ある一つの部屋が開き、男性が出てきた。どこの誰だか知らないけど…ナイスです!!

「あのっ！」

私は必死にその男性に近づく。その男性は私の存在に気がつくとし顔を歪めたような気もしたが私はその疑問を置いてまず、自分の問題から解決していくことにした。

「失礼ながら、表門はどちらに御座いますでしょうか」

「表門、か？」

私が男性に問うと、その男性は意外そうに聞いてきた。他に別の事を問われるとも思っていたのかな。その男性は意外そうな顔をしながら私の後ろを指さした。

「この道を少し行った所に騎士が待っている。そこで再び聞くといい」

「そうですか。有難うございました」

私は男性にそう言って体を折り曲げる。私は男性にお辞儀をしてから男性の指した方、後ろへと振り向いて前に進むとしたのだけとそれを先程の男性が遮る。

「あなたは何の用でこの城に？」

「私ですか？…妃を選ぶパーティーに招待されてしまいました」

「されてしまいました？」

「あ、いえ…していただいたのですが、急用が入ってしまいました…どうしても外されない用事なのでパーティーは辞退させていただきます…」

私がそう言うと男は意外そうな顔をした。うん。そうよね。第妃選  
びのパーティーって誰でも喜ぶとか思っているのよね。そり  
ゃ一世の中の女性は喜ぶでしょう。ただ喜ばない女性もいるのです。  
私はニコリと微笑んで言った。

「お時間をお取りさせて申し訳ありませんでした。それでは失礼し  
ます」

そう言うて私は一礼し、後ろを向く。そして私は二度と会うこと  
ないだろう王子様を一目見て思った。

（綺麗なお顔ですね）

私は相手が第一王子、フレリアル・ジーンだということに気づい  
ていた。正しく言えば、話しかけた後で気づいた。本でこんな場面  
があれば、気づかないだろう。ここで別れて、ヒロインが会場に戻  
る気になってそこで偶然再会した王子様とヒロインは恋に落ちる。  
というのが王道なのだろうけど。私はヒロインでもなんでもないの  
でそんな恋には落ちない。王子様は綺麗な顔をしていました。…そ  
れで？私はやはり噂と事実というものは一致しないと思った。流れ  
ていた噂とは全く違う印象を受けた。

### 3話 「まだ寝てるのって、まだ早朝でしょ…」

次の日の朝、私の目覚めは最悪だった。何故かって？…アイサの大声で起きたからよ。

「エルー！まだ寝てるの？！」

「まだ寝てるのって、まだ早朝でしょ…」

私は眠たい目を擦りながらアイサに言った。アイサは私の家なら自分の家のように入ってくる。私を毎朝起こしに。私は朝に弱いほうなの。だから、アイサに起こしてもらってるんだけど…最近では起こし方が何だか雑なのよね。その理由は分かっているのだけれど。

「まだ怒ってるの？パーティーの事」

「ありえない！何でパーティーに参加しなかったの！？しかも第一王子に会っているのに！」

そう。アイサの不機嫌の理由は、私がパーティーの途中（というか、まだ始まってもない時点）で抜け出てきた事。そしてすっかり第一王子にも会ったって言うてしまっただけからアイサの機嫌は悪いまま。

「パーティーから三日も経ったのに」

「怒って当然でしょ！折角、男に興味のないエルーに興味を持たせるチャンスだったのに！」

あ。アイサの目的ってそれね！可笑しいと思ったのよ。あの令嬢を怖がってるアイサが私を令嬢の群れに行くのをすすめるなんて。

「別に興味がないわけじゃないわよ？ただいい人が現れないだけよ」  
「いい人を見つけようとししないでしょ」

私はアイサにそう言われて黙る。私は相手を探そうとしない。というか、そういう気もない。そんな私にアイサは色々心配をしてくれてるみたい。…別に心配するようなことじゃないと思うんだけどね。

「そう思ったから送っておいたわよ」

「…何を？」

「お手紙を」

天使のように、にっこりと微笑む友人がこの時私には悪魔に見えた。…大体、本人を無視して私の名前で手紙出すってどういうことよ！しかも第一王子宛てに。庶民が気取つてると思われるじゃないの！というか！またあの地獄のような場所にいかなければならないの？！

「あ、今日お返事が来ていたの！さっき内容を読んだら是非ともお会いしたいらしいわよ！」

私は頭を抑える。この面倒見のいい友人がここまでお節介だと思わなかったわ…し・か・も！何で第一王子も是非ともお会いしたいなとど！私はアイサに引きずられながらそんな事を考えていた。

「はあ…」

私は大きな溜息を、大きな立派な門の前でついた。何で二度もこの



ような場所に来なければいけないのよ。本当なら私はあの家で今頃、のんびりと過ごしているはずなのに！私はそう思いながら目の前の大きな門を睨みつける。いきなり会うと言われても、私がドレスを用意しているはずなく、結局アイサのドレスを借りた。のはいいのだけど…

「派手」

ものすごい派手。何でこんなのを持つてるのよ。私は薄水色のドレスを身にまといながら思った。だいぶ抑えた色のドレス。アイサの家にはものすごい色したのがいっぱいあった。私はそろーっと門の中に入っていく。ああ……これで暫くは地獄だ……私はトボトボと歩いていく。途中であつた侍女さんに第一王子様はどこですか。と聞いたら笑顔で応接間に案内してくれた。

「フレイアル様はもうまもなく来られます。少々お待ちください」

笑顔で一礼してから出ていく侍女さん。私はソファに座りながら王子様の登場を待つ。私が案内された応接室は応接室だけあって豪華だった。なんというか…

（居心地の悪い部屋）

普段、こんな豪華な部屋を使わない庶民の私にとって居心地の悪い場所ではない。この部屋であの人を見なければいけないのね……全部アイサのせいだわ！私が心の中でアイサに怒っていると、扉が開いて第一王子様が現れた。

「……待たせてすまない。初めまして、というべきか？」

「いえ、三日ぶりでございますわねフレイアル殿下」

私はそう言って一礼する。庶民にしてはでかい態度なのだろうけど……いいわよね？これくらい。別に無礼ってわけじゃないし……第一王子様が座るのを確認してから私は先程のソファに座った。

「……」

「……」

豪華な部屋の中に侍女さんが入れるお茶の音だけが響いている。私と第一王子様の間には会話はなく、ただただお互い黙っているだけ。そんな時、扉からもう一人誰かが入って来た。私が扉の方を見るとそこには笑顔を浮かべた男性が立っており、その笑顔は苦笑いにも見えた。私は挨拶をすべきか迷ったのだけれど、その人が着てる衣服を見てかなり高貴なお方であるため、立ち上がった。

「初めまして。エルシア・サマーニと申します。以後よろしくお願  
いいたします」

私はそう言って頭を下げた。というか、今気づいたのだけれども。これは庶民の私が知っている礼儀作法であって高貴な方々とは全く違うもの。無礼になってないかしら。そんな私の不安をかき消すかのように目の前の男性は笑顔で言った。

「僕はシタリス・ジェーン。よろしくエルシアちゃん！」

私は目の前の男性 シタリス様が王子であることに驚いたと同時に初対面から馴れ馴れしく『エルシアちゃん』などと呼ばれた不快感を覚えた。しかしそれを露骨に顔へ出すわけにもいかないので、心の中に止めておいた。

「シタリ…なぜ来た」

「だって、兄上だと会話が弾まないでしょ？僕が来たときも無言だったじゃないか」

シタリス様に問うたフレイアル殿下は、そう言い返されて黙った。

シタリス様は私よりも少し年下で、それでも身長は私と同じか、少し高いくらい。人懐っこい性格のようで、初対面の人にも知人のように接している。一方フレイアル殿下は私と同世代にも関わらず、大人のような雰囲気を出していて、身長は私の頭一個分高く、体も目立つほどではないにしろ、がしりしている。クールそうで近寄り難いけど、流石この国の王子って感じ。後半は朝、アイサが噂を私に話していた。…勝手に。

「エルシアちゃん、座って」

シタリス様が私にそう言ったので私はソファに座った。…一つ、疑問に思う事があるの。

「何故、シタリス様は私の隣なのでしょう」

私は、私の隣に当然のように座るシタリス様にそう問いかけた。普通、フレイアル殿下の方に座るのでは？などと思っているとシタリス様が笑顔で言った。

「だって、エルシアちゃんの隣に座りたいんだもん」

私は思わず、顔を歪めそうになった。男が『もん』とか言っても、可愛くはないのですが。逆に気持ち悪いです。なんて言えるはずもなく、私は不快感を隠すため微笑んだ。

「それで、エルシアちゃんは昨日のパーティーには来なかったの？」

「はい。急用が入ってしまい、どうしても参加出来ない状況になったため、仕方なく辞退いたしました」

「ふ〜ん…で、エルシアちゃんは兄上を見るの初めてでしょ？感想は？」

シタリス様は私にそう問うてきた。これは答えなければいけないのよね…私は言葉を選びつつ、そんな言葉を心の中で呟いた。何故かこの質問にフレイアル殿下も食いついているようなので、あまり無礼な返事はできない。

「感想と申しまでも…噂通り、素敵なお方、凜としたお方だと」「本当に？」

「はい。何故、嘘を申さなければいけないのですか？」

私はそう言いながら首を傾げる。おもいきり嘘をついているのだけどね。仕方ないじゃない。反逆罪とかで死ぬのは嫌よ。そんな間抜けな死に方。私の質問にシタリス様はまた、笑顔で答える。

「いや、本当にそう思ってるのかと思ってね。他の令嬢とは目が違う気がする」

「それはそうでしょう。私は庶民ですよ？令嬢様達と比べられるなと恐れ多い」

私は少し困ったような顔をしてシタリス様に言った。令嬢達と比べられるのは間違っていると思う。けど、恐れ多いとは思っていないのが私よ。ってこの前、アイサに言われた気がする。

「そう？エルシアちゃんは令嬢と比べても恥ずかしくないと思うよ？」

「お褒めのお言葉、ありがたく頂戴いたします」

私は微笑んでそう言った。思ってもないことを言って。私は心の中で、シタリス様を睨んだ（あくまで心の中）。

「僕の勘違いかもしれないね。エルシアちゃんは兄上のお嫁さんになる気はあるの？」

「…私はどちらかというと、フレイアル殿下の事を尊敬しております。ですので、妃の地位に立ちたいというよりも、一国民として応援をしたい、ということになってしまいます。ですから、妃になる意思は持っております」

私は先にフォローの言葉を入れてから、その気はない事を伝える。これで無礼にはならない…ハズ。というか、断つてる時点で無礼なのよね。ただ私は国民として、見守っていききたいというのは本音だし、嘘は言っていない。…あ、言ってる。尊敬つてのは嘘です。

「ええ！？無いのに手紙を送ったの？」

「えっと…それは、なんといいですか…私を心配した友人が、勝手にフレイアル殿下に手紙を送ってしまったようでして」

私が言うとシタリス様は残念というふうな顔をした。何が残念なのか私には分からなかったけれど、一応微笑んでおいた。

#### 4話 「…慣れって怖い」

フレイアル殿下にお城へ招かれてから一週間が過ぎた。私は何も起こらない、平和な日常が帰ってくるのだと思っていたのだけれど、現実はそのも簡単に行くはずなく…平和な日常はまだ、帰ってこないようだった。

「エルー。もう朝だよー」

私はその声で朝をむかえた。あの一件からアイサの機嫌は見るからよくなり、いつも通りの優しいアイサに戻っていた。

「おはよーアイサ」

「おはよーエルー。もうすぐできるよ」

私はその言葉に頷いて、いつもの、自分の席に座る。アイサは私と同じ年だけど、お姉ちゃんみたいに面倒見がいい。でも、そんな彼女にはダメな一面もあるわけで…

「おはようエルシアちゃん。今日も可愛いね」

私は目の前で優雅にコーヒーを飲むシタリス様を見て、失礼ながら溜息をついてしまう。アイサのダメな一面はこういうところだ。私を心配してくれるのはいいのだが、少し、やりすぎるところがある。

「おはようございますシタリス様。相変わらず、このような場所にフラフラ来るほどお暇なんですね」

「エルー！ダメでしょ」

ダメでしょって…私が嫌味を言う原因は全てあなたにあるのよアイサ。何でアイサは私の家に勝手に人を上げるのよ…私は今度は遠慮なく溜息をついた。シタリス様は一週間前、私がフレイアル殿下に招かれ、一日経った朝、私が起きるとアイサと楽しそうに話していた。私ははじめはビツクリしていたもののシタリス様が家に来るたびに驚いていたので一週間たった今ではまたか、という反応になつてしまっている。

「…慣れつつ怖い」

私は誰に聞かせるわけでもなく、そつと呟いた。それでも聞こえていたのか、シタリス様はニコリと笑った。アイサはいつも通りの反応で、ニコニコしながら上機嫌で朝ごはんを作つてゆく。それがシタリス様の分まで当たり前のように用意されているのを見て、私は三度目の溜息をついた。

「溜息付いたら、幸せ逃げちゃうよ？」

「もう逃げているので大丈夫です」

私はシタリス様が言ったのに即答し、目の前の人物にこの一週間、疑問に思っていたことを問うた。

「何故、シタリス様は私の様な庶民の家に毎日毎日、来てくださるのですか？本来ならば、私の様な者がシタリス様ともあろうお方にお聞きするなど、あつてはならない事です。しかし、それでは私としても納得できないのでございます。よろしければ、教えていただかないでしょうか？」

「え？兄上のためだけど？」

私はキョトンとして答えるを見て驚くと同時に最悪な気分におちい

った。兄上の為。つまりフレイアル殿下の為という事は私を妃候補に入れていたという事だろう。私は頭を抱えそうになる。シタリス様は本気で言っているらしく、いつもの嘘くさい笑顔が消えている。目の端で喜びを体に表し、ガッツポーズしているアイサを見て私は顔を歪める。

「だってさー、兄上って仕事ばかりで女性と関わろうとしなかったわけ。エルシアちゃんの手紙に返信書いたのもネファリーだしさ」  
「ネファリー様？もしかしてネファリス様の愛称でございますか？」

横からその言葉に反応したアイサが言った。ネファリス様？…ゴメンナサイ。何言ってるのか全くわかりません。最近になってようやく王子様達の名前を覚えた私にそんなそんな訳の分からない名前で呼ばれても困るわ。

「訳の分からない名前じゃなくてネファリス様はこの国の宰相様よ」  
「宰相様？」

私は何故、アイサが私の心の中の言葉が分かったのかは棚上げにし、一番に（正確には二番）疑問に思った事を口に出す。するとアイサは興奮したような、キラキラした目をして話し始めた。

「そう！ネファリス・ロード様。ネファリス様はフレイアル様と幼友達で、その容姿はフレイアル様と並ぶと言われているわ！しかも！フレイアル様とは真逆、シタリス様と似た甘い雰囲気を常にかもし出しているお方！！それでいて、とても優しい方だと噂になっているのよ！ただ、既に婚約者がいると言う噂があるから、皆、鑑賞用として遠くから見ているわ。分かった？」

私は頷く。力説ご苦労様です。宰相様はシタリス様と同じく、裏側



にとても厄介な性格をお持ちだと。私にはそんな噂は信じられないので一応、そう頭の隅に記憶しておいた。

「…取り敢えず、宰相様には注意ね」

「何か言った？」

「いいえ？それより、よくそんなに知ってるわね。アイサ」

私はぼそつと言った言葉を聞かれていないことがわかった、話を逸した。と言つても、元々気になっていた興味のある話題に変えた、というだけなただけ。

「普通はこれくらい知ってるものよ。エルーが知らなすぎるのよ」

「そうなの？」

「そうよ。聞いてくださいませシタリス様！この前までこの子、貴方様や、王女様、フレイアル様の事を殆ど知らなかったのですわ！  
！」

「えーエルシアちゃん酷いー僕のこと知らないなんてー」

子供がすねたような真似をするシタリス様を私はちらつと見て、準備できた朝ごはんを食べ始める。二人はそんな私を見て、もう反応しないと思ったのか自分達も朝ごはんを食べ始めた。

私は今、お城に来ている。何でかって？お手伝いよ。アルバイト私はお金が有り余ってるわけじゃないのでこうしてたまーに何かお手伝いをさせてもらうの。いつもは侍女さんのお手伝いしてるのだけれど、今回は少し違うらしい。なんでも、王女様のお世話をしたいとか何とか。これも侍女さんたちの仕事なんだけど…私は少し嫌な予感をしつつ、前を歩くシタリス様についていく。王女様は現在、8

歳。しかし、8歳にしては完璧な立ち振る舞いをするとか。そして王女様もとてもお綺麗で素晴らしいお方だそう。そう考えているうちに、シタリス様があるひとつの扉の前で止まったので私もその数歩後ろに立ち止まる。私は今、侍女さんが着るような服を着ている。侍女さんにこの服を渡された時、少しだけ目に哀れみが見えたのを私は見逃さなかった。

「エルシアちゃん。冷静にね」

シタリス様はそう言っただけで扉をノックし、少しの間を開けて扉を開いた。声は微かに聞こえたのでそれが合図のよう。私は侍女さんに教えてもらったお辞儀をして部屋に入った。うん。なんだか、侍女さんが私を哀れみの目で見たの、わかった気がするわ。シタリス様が扉を開いた瞬間、小さな女の子がシタリス様を待ち構えていたように立っていた。

「シタリス様。無理だと思えます」

私は前にいるシタリス様に向かって小さい声で呟く。私の直感では、とても私には抱える事の出来ない人だと思っているの。雰囲気がある語っているもの。

「そこをなんとか！エルシアちゃんだったら大丈夫だよ！」

同じように小さく呟くシタリス様に私は小さくした声で主張します。

「私にはあのお方の世話をして冷静でいられる自信がありません。よってこのお仕事は辞退「ダメだよ！サリーがエルシアちゃんを見ちゃったもん。もう、辞退できないよ」……」

シタリス様は必死に私を王女様の世話に付かせようとしている。私は小さく、誰にも聞こえないように溜息をつく、シタリス様を見て頷いた。シタリス様はホツとしながら放置していた王女様に向き直り言った。

「サリー、新しく君の世話をする侍女を連れてきたよ」

「お兄様は侍女さんと仲がよろしいのですか？」

幼い声でそう問うてきた王女様にシタリス様は笑顔を見せるだけ。

「お兄様。その者と二人で話をしたいのですが」

「ああ、僕は外すよ。部屋の外にいるから終わったら呼んでね」

シタリス様はそう言つて部屋の外に出ていった。私は王女様に向き、自分の自己紹介をした。

「お初にお目にかかります、エルシア・サマーニと申します。本日からあなた様の身の回りの世話をしよう、言われております。よろしく願います」

「ええ、よろしく。それよりあなた、お兄様とはどういう関係なのかしら」

私は思った。この方はブラコンなのね。私はそんな事を冷静に判断しながら言った。

「私とシタリス様の間には何の関係もございません。王子と一国民にすぎませんが」

「一国民なら何故、お兄様とお言葉を交わしているのかしら？」

私はその言葉に、冷静に言葉を返す。

「王子が国民と言葉を交わして何がいけないのでしょうか？あなた様も私と言葉を交わしているでしょう」

「私はお兄様、と言ったはずよ。私と言葉を交わしている事はどうでもいいわ。けど、何故庶民のあなたが、王族であるお兄様とあんなに親しそうに言葉を交わしたのかしら？」

私はその言葉にピクリと反応した。どこにかというと、親しそうに言葉を交わした、というところよ。親しそうに？王族と親しそうに話すわけじゃないの！

「あなた様には私とシタリス様が親しそうに言葉を交わしたように見えたのですか？」

「ええ。違うのかしら？」

「はい。それは誤解でございます」

「でもお兄様は侍女に笑顔など見せない人よ？」

私は先程のシタリス様を思い出す。確かに私に向かって笑顔で説得しているわ。それかしら？けれど、あれはいつものことよ？もしかして、シタリス様は王女様の目が届くところでは侍女さん達には笑顔ではないのかしら。…シタリス様、余計なことをしてくださいませわね。

「それはあなた様が知らないだけでございます。シタリス様は普段、とても素敵な笑顔で皆に接しております」

「そうなのかしら？」

「私に聞くより、ご本人様にお聞きした方がいいのではないのでしょうか。呼んでまいりましょうか？」

「そうね。お兄様を呼んできてちょうだい」

「かしこまりました」

私がそう言つて扉の方に振り向くと王女様は私を呼び止めた。私が  
王女様の方を向くと王女様は言った。

「あなた様ではなく、サリーと呼びなさい」

「かしこまりました、サリー様」

とにかく、面倒な事はシタリス様に押し付けることにしました。

#### 4話 「…慣れって怖い」(後書き)

話が長くなったので一旦、区切ります。

エルシア、面倒なこと(サリー様)をシタリス様に押し付けました  
ww

5話 「ええ。生活の為です」(前書き)

遅くなりました！すみませんm(――)m

それと前回に比べてかなり、短いです

## 5話 「ええ。生活の為です」

「お兄様？どういう事で御座いますの？」

「えーっと…」

私はシタリス様から向けられる助けの眼差しを無視し、お茶を入れる。今、サリー様が私が話した全ての事をシタリス様本人に確認中。先程、部屋を訪れたフレイアル殿下はソファでその光景を眺めておられます。…助けては、いないわ。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう。本当に侍女をやっているんだな」

「ええ。生活の為です」

私はフレイアル殿下のお言葉にそう答えた。私はここまでフレイアル殿下と会話ができるようになりました。…全く嬉しくないのだけど。第一、こんな庶民の、しかも素人に近い人を何でサリー様の部屋付きにするのよ。

「エルー、お兄様にお茶を」

「かしこまりました」

私は一礼してサリー様とシタリス様のお茶を用意する。何故か愛称でサリー様に呼ばれている私。フレイアル殿下によれば、サリー様が誰かを愛称で呼んでいる所を初めて見たと言ってらっしゃいます。…全く嬉しくないのよ。少なくとも他の侍女さんより好かれてるって事でしょ？…嬉しくないわね。

「サリー様。御用意できました」



「そこに置いてちょうだい。さあお兄様。お茶でも飲みながらお話をいたしましょう」

満面の笑顔で言うサリー様。その笑顔に顔がひきつるシタリス様。しかし、その笑顔を見せられて断れるはずもないシタリス様は渋々ソファーに座った。サリー様はフレイアル殿下を見ると微笑んで、言った。

「フレアお兄様は侍女さんとお知り合いなんですか？」

「ああ、二度会っていてな。それがどうかしたか？サリー」

流石フレイアル殿下。回答に困ることなく返事したフレイアル殿下は逆にサリー様に聞き返した。

「いえ、何もありません。エルー菓子は…」

「御用意にしております。ハーブのクッキーでよろしいですか？」

「ええそれで。こんなに優秀な侍女、なぜ今まで見かけなかったのでしょうか」

優秀？…褒められているはずなのに私はその言葉をいただいても全く嬉しくないのはどうしてかしら？

「それは彼女が部屋付きや、表に出る仕事をしていなかったからだろう」

「そうなのですか？それなら仕方ありませんわねえ。さて、お兄様。そろそろ本当の事を教えてくださいますか？それくらいの事、直ぐに言ってしまうては？」

私はサリー様とフレイアル殿下の間に菓子を置く。と同時に、シタリス様を見て首を横にふった。それはもう言ってしまったては？と

いう合図。シタリス様はそれを読み取ったのかとても沈んだ顔になった。

「サリー…話さなきゃダメかな？」

「お兄様はその程度の事で私に隠し事をなさるのですか？」

疑問を疑問で返され、シタリス様は俯いた。そして決心したように顔を上げると、サリー様に話し始めました。サリー様はシタリス様をじっと見て話を聞き、フレイアル殿下はそんな二人を見て優雅にお茶を飲み、私はそんな二人に目をやることもなく、淡々と侍女さんがやる仕事をやっている。

シタリス様がサリー様から解放された頃、サリー様のお部屋にある男性が現れた。多分、宰相様。宰相様はサリー様のお勉強を教えてらっしゃると、サリー様ご本人聞いた。

「初めましてエルシアさん。ネファリス・ロードと言います。サリー様のお勉強を見させてもらっています」

「初めまして宰相様。エルシア・サマーニと申します。本日からサリー様のお世話を任されておりますので、以後お見知りおきを」

私はそう言って一礼する。宰相様は笑顔で一礼した。…ヤバイヤバイ。その美貌は誰もが見とれ、惚れるものなのだろうけど、私にとっては厄介な人にしか見えなかった。それからサリー様はお勉強を始め、シタリス様とフレイアル殿下は優雅にお茶を飲みながら、その姿を見ておりました。

「エルシアちゃん。お茶ちょーだい」

「分かりました。フレイアル殿下はどうなさいますか？」

「ああ頼む」

「はい」

私はコップを下げて新しい物へと変え、それにお茶を注ぐ。途中、シタリス様の邪魔が入ったものの、シタリス様を相手にしながら、お茶を入れる。邪魔をしてくるシタリス様にキレなかった私を褒めて欲しいものだ。

「お待たせいたしました」

「ありがとうございます」

フレイアル殿下はそう言ってお茶を取る。思ったのだけれど、フレイアル殿下は必ず、何かをしてくれた相手に対し、お礼を言う。そんなの当たり前だと思うかもしれないけど、実際には全く違う。他国のある国では当たり前のようになっている侍女さんの名前すら、覚えていないらしいのだから。それに比べればフレイアル殿下は優しい方だと思う。王族にしては。

「どうかしたか？」

「あ、いえ。申し訳ありません」

どうやら私は考えている間、ずっとフレイアル殿下の顔を見つめていたようだ。私は謝罪の言葉を述べ、またまた、侍女さんの仕事を淡々とこなしていく。

## 5話 「ええ。生活の為です」(後書き)

近々、キャラ紹介を出そうと思っています。

えーっと、主人公と作者が進行で進めていく形で。

出すのは、エルシア、アイサ、フレイアル殿下、シタリス様の4人。

サリー様とネファリス様は登場が少ないのでまた多くなったら。

そっついや、アイサの名前出してないな。

なんて思ってたらキャラ紹介書けばいいんじゃない？

という発想に達しましたw

最近、忙しいので、毎日更新は難しいと思いますが、1週間に何回かは更新するのでよろしくお願いします！

…今思ったら、フレイアル殿下もそんなに出てないな…

## キャラ紹介 1

作「こんにちわー！美奈と申します！」

エ「宣言通り出てきたわね」

作「出てきましたよー。本編にでるつもりは全くないので、こういうところでおこうと思って」

エ「ふーん。そういえば、作者の作品いっぱいあるわね。短編オンラインだけど。続編とかもあるわね」

作「いや、連載もあつただけど、複数すぎて話こんがらがっちゃつてさあ…一からやり直しました」

エ「…なんだか、この話が無事、完結するのか心配になってきたわ」  
作「大丈夫だよ！…多分」

エ「自信がないのに大丈夫とか言わないでよ。って雑談はここまでにしてキャラ紹介に入るわよ」

作「…はい（なんだろうこの主導権を取られた感）まず始めに、エルシアが住んでいる国とかいろいろ説明します」

ミフェス王国のファス。

ファスはミフェス王国のほぼ中心部にある街。と言っても貴族などはおらず、エルシアなどの庶民が多く住み着く街。この街は特に技術が発展しており、服の質も、他の庶民と比べれば良い方。エルシアはそんな街でアルバイトをしながら生活中。この街は技術が発展しているにもかかわらず、人出が足りていなくて、アルバイトなどは有り余っている。

エ「…短」

作「はう！それ言わないで！若干気にしたんだから！次からはキャラ紹介。登場順のはずです」

エ「…（若干なんだ）」

エルシア・サマーニ 16歳 女

見た目は一般的な庶民だと本人は思っている。が、所々のパーツが整っていて美人とまではいかないが平凡とも少し違う、というふうな顔立ち。髪の色は蒲公英色<sup>たんぽぽいろ</sup>。光が反射するたびにキラキラと光り、ツヤがある髪。胸あたりまで伸びている髪の毛を両端に少し残して後ろでひとつにまとめるのが彼女の基本的な髪型。目は金色。身長は155cmで少し平均より小さいくらい。性格は面倒事が嫌いですが、恋愛感情には鈍感。後は少し鋭い。

フレイアル・ジェーン 16歳 男

見た目はクールな印象が強いフレイアル。第一王子で、国王がいい時期を見て国王の座を譲るそう。女性にあまり興味がなく、自分の結婚相手など考えなかったフレイアル。今は、少しエルシアを意識しているはず。クールな印象が強いものの、その整っている顔で侍女さんや国中の女性を虜に。周りの男性陣からの評判はいい。ただし、国中の男性陣がどう思っているかは別。髪の色は瑠璃色<sup>るりいろ</sup>。ツヤがあるその髪は、耳に掛かるくらい伸びており、その色がまたクールというか。目はスカイブルー。身長は170cm。性格は自分の事はしっかりとするタイプ。自分に向けられた感情にはすぐに気づくほど鋭いが、それは恋愛感情を除いて。エルシアと同じく、恋

愛感情になると鈍感。

アイサ・カルーラ 16歳 女

エルシアの友人であり、お姉さんの存在。見た目はおしとやかなお姉さんという印象が強い。庶民らしく平凡な顔立ちをしているがよく見れば所々整っている。髪の色は黄赤<sup>きあか</sup>。目は紫。エルシアとは違い長さは肩までしか髪がないので髪飾りを止めている。身長はエルシアよりやや高い156cm。性格は普段は気遣いのいい人なのだが、一つ相手に心配することがあれば余計なことをしてしまう厄介な性格。しかし、それは親しい人物以外にやりすぎてしまう事はない。恋愛感情などは鋭い。

シタリス・ジエーン 14歳 男

フレイアルの弟であり、フレイアルの嫁としてエルシアが一番適していると考えている。本人達は気づいてないが。シタリスとフレイアルの関係は義兄弟であり、母親が違う。しかし、そんなことで争うこともなく、シタリスはフレイアルに世話を焼いている。（普通は逆なのだが、女性関係になると世話を焼いている）髪の色は菖蒲<sup>あやめ</sup>色。目は空色。髪の長さはフレイアルとは違い、短い。しかし、ものすごい短いと言う訳でもない。身長は157cm。性格は意外に悪戯とかが好きなタイプ。普段は常に笑顔だが、家族といるときは様々な顔を見せる。

作「一通り今出てきているキャラは終わったねー」  
エ「あと二人だけど、その二人はもう少し出番を待ってからにするの？」

作「うん！流石に出番少ないときに紹介するより、多いときに紹介したほうがいいでしょ？」

エ「そうね。さて、キャラ紹介も終わった所で、次回予告」

作「はい！今回はフレリアル殿下の視点で書きたいと思ってます！  
」

エ「それでは」

作・エ「また次回、お会いしましょう！」



## キャラ紹介 1（後書き）

作「ここでお知らせ。文中に出てくる様々な色の参考はこのサイトからしております

『<http://www.color-guide.com/index.shtml>』

色を探してみてください！

沢山載ってました！

分からない事があれば聞いてください！

さてさて。次回は言ったとおりフレイアル殿下視点で書こうかと思ってます。

作者が女なので上手く書けるかどうかはわかりませんが…  
って普通でもアレなんですけど（；^ ^）

では、また次回お会いしましょう。

ここまで読んでいただいてありがとうございます（T T）  
アリガトウ

## 王子様の心情（前書き）

今回は宣言していたとおり、フレイアル殿下視点。

サブタイを「王子様の心情」にしています。

…いい名前が思いつかなかったんですよ（つ　　）

とりあえずどうぞ！

## 王子様の心情

俺、フレイアル・ジエーンは正直、女が嫌いだ。

正確には俺に媚びてくる女が嫌いだ。そんなの誰でも嫌いと思うが、俺の場合は第一王子という立場上、そういう女しかいない。しかし、俺はこの16年生きてきた中で初めて自分に媚びを売らなかった女に出会った。エルシア・サマーニ。彼女の名だ。彼女と初めて会ったのはパーティーの時。妃を選ぶパーティー。俺はその時、仕事を抱え込み、少しパーティーに遅れていた。

ようやく仕事が終わわり、俺が執務室を出た瞬間、一人の女が俺に近づいてきた。

「あのっ！」

俺は声をかけられ一瞬、顔を歪めるが、直ぐに元の顔に戻る。相手も気にしていないようだった。女からいつも聞かされている吐き気がするほどの言葉が出てくると思いきや、彼女が言った言葉は意外なものだった。

「失礼ながら、表門はどちらに御座いますでしょうか」

「表門、か？」

正直、予想していなかった言葉に目を見開く。そのまま、彼女の後ろを指さした。そしていう。

「この道を少し行った所に騎士が待っている。そこで再び聞くといい」

「そうですか。有難うございました」

彼女はそう言つて、丁寧にお辞儀をした。しかし、そのお辞儀は綺麗ではあるものの今まで見てきた令嬢達とは異なっているものだった。そして、俺の答えを聞いて直ぐに帰ろうとした彼女を、俺はなぜか止めてしまう。彼女が不思議そうにしているのを見て俺は問いかけた。

「あなたは何の用でこの城に？」

実際、そんな事を聞こうと思つて引き止めた訳ではなかった。反射的に止めたから、俺は直ぐさま質問を作った。

「私ですか？…妃を選ぶパーティーに招待されてしまいました」

その時俺は、僅かながら喜びを感じた。それがなぜだか、未だに分かっていないが、とにかく喜びを感じた。しかし、俺はふと疑問に思つた事を口に出す。

「さ……されてしまいました？」

文が明らかに嫌そうだった。その時感じた。自分の目の前にいる女は、そこらへんの令嬢とは違う。服装から見て庶民だろうが、どうしてそんなに嫌そうに話すのか。俺が疑問に思っていると彼女は何かに気づいたように言い直した。

「あ、いえ……していただいたのですが、急用が入ってしまいました……どうしても外されない用事なのでパーティーは辞退させていた……く事にしましたのです」

明らか、嘘だろう。完璧な笑顔、完璧な口調だが、何かに気づいた顔をした時点でバレている。しかし、その切り替えの速さに俺は驚いたと同時に、意外だった。女の中にはこんなにも頭の回転が速い者がいたのか、と。

「お時間をお取りさせて申し訳ありませんでした。それでは失礼します」

そう言っただけで彼女は丁寧にお辞儀をしてくるりと俺に背をみせ、歩いていく。俺はその彼女の背中を見ながら思った。あの女は絶対、俺の正体に気づいている、と。根拠はない。しかし、そう断言できた。彼女が去ってから俺はパーティー会場へと出向いたわけだが、令嬢との会話が一切記憶に残っていない。あの、不思議な女の事で頭がいつぱいだった。パーティーが終わり、俺は再び執務室に来ていた。ネファリーに会ったためだ。あの、パーティーを一から行なったあいつならわかるだろうと思ったからだ。彼女の名前が。

「はい？」

「いや、だから。今日、庶民の女来てただろ？そいつの名前教えろよ」

俺がそう言っただけでネファリーはキョトンとした。ネファリーとは幼い頃からの知り合いで、色々と心を許せる存在なのだ。そのネファリーが俺を変なものを見る眼で見ている。

「…なんだよ」

俺が不機嫌気味で問うと、ネファリーは言った。

「頭がおかしくなった？」

「お前がネファリーじゃなかったら死刑確定だな」

「僕じゃないと言わないって。てか、言えないって」

ネファリーがそういうのでそれもそうかと思う。第一王子にそんな口自体きかないだろう。…こいつは別だが。

「で、何でそんな事言っただよ」

「だって、あのフレアが、女の子に、しかも庶民に興味を持ったんだよ？驚かない方が無理だって」

「…」

言い返せなかった。俺自身でもそう思うからだ。自分が、あの女に興味を持ったことに自体、驚いているんだから。

「で、どんな女の子？」

「確か、髪が蒲公英みたいな色で目が金色だ。ドレスは若草色」

「……ゴメン。僕、会場で若草色のドレスなんて見てないよ？」

「…あ、忘れてた。確か、俺が行く前に帰ったと思うぞ」

「ええ！？」

驚くのも無理ない。俺だってあの女から帰るって言われてびっくりしたんだから。ネファリーがパーティーに出席した女達の名前を確認していく。ネファリーの目が止まった。見つけたのだろう。あの女の名前を。ネファリーは少し、困った顔をして言った。

「フレアが言ってる子の名前は多分、エルシア・サマーニ」

「…珍しいな」

俺は自信がないようにいうネファリーを不思議に思った。ネファリ

「はおそらくこの国一番の情報を持っている。宰相だから当然、と思うかもしれないが国民に分かって城の人間にわからないことは多い。しかしこの男は自分が不安にならないようにとことん調べる。だから、こいつの情報は信用できる。けど、そのネフアリーが自信のない顔をしている。ネフアリーは苦笑いして俺に話し始めた。」

「うん。この子の情報は、分からない事が多過ぎる。家族構成、当人がどういう人物なのか、どこで生まれたのか、どこで育ったのか、意図的に探られないようにしていた。わかるのは名前と年齢だけ」  
「…結構やばいんじゃないか？」

そういう人間がこの国に存在するのはヤバイんじゃないか。俺はそう思った。そいつが他国の奴として、何もわからないとなると色々面倒な事が起きる可能性がある。政治的にも、個人的にも。しかし、ここで俺の中ではある疑問が浮かんた。

「そんな人物を、何で候補に入れたんだ？」

可笑しい。何故、危険性が高い人物を妃候補に入れたのか。そんな人物、はじめから外していればいいだけだ。

「これは僕の予想だけだね。多分この子はそんなに危険じゃないと思うんだ」

「は？」

「だってもし他国の奴だったらもっとうっかりとした個人情報を作り上げると思わない？」

確かにそうだな。俺はネフアリーの言葉に頷く。そして少し、考えてみた。俺だった場合はそうする。じゃあ何故この女の情報はわからないのか。

「…わからないな」

「だよ。けど、謎が解けたよ」

「何の？」

「フレアがパーティーに集中していなかった謎が」

俺はその言葉を聞いて、顔が引き攣った。俺はそれほどわかりやすかったのか。ネファリーの顔をみる限り、かなりわかりやすかったのだろう。ネファリーがニヤニヤしてるのを見てそう思った。ネファリーはその顔のまま言った。

「取り敢えず、その女の子と話をしないとね」

「話す意味がわからない」

相変わらずニコニコしているネファリーを見て抵抗するのを諦めた。それから三日後、俺は再び彼女と対面することになる。



## 王子様の心情（後書き）

やっぱ、異性の感情は書くのが難しい。

後、口調とか？

私が書いていて思ったことは、エルシア視点で書いていたキャラのイメージが変わった。

ってことですかね。

ネファリーはなんか口調が滑らか？だから思ってたのとだいぶ違うし。

フレイアル殿下もイメージがだいぶ変わりましたw

では、読んでくださってありがとうございます！！

6話 「なぜそのような質問を？」（前書き）

今回は結構短めです。

## 6話 「なぜそのような質問を？」

今日も、私の周りは絶好調のようだ。

「サリー様、そろそろ勉強の時間が…」

「ネファリー！後にして頂戴！今、エルーに教えてもらってるんだから！」

「でもサリー、エルシアちゃんにも自分の仕事があるし」

「お兄様は黙っていてください！」

私の周りで絶好調に言い合うネファリス様とサリー様、そしてシタリス様。私はサリー様に花言葉を教えていただけで、勉強に支障はでないようにしていた。けど、予想以上にサリー様が気に入ってしまい、今この状態が出来上がった。

「サリー様、花言葉はお勉強が終わった後にいたしましょう」

「でも…」

「そうですね。お勉強が終われば、サリー様が大好きな菓子をお出ししますよ？」

「ネファリー！やるわよ！」

「頑張ってくださいませ」

サリー様は張り切って勉強に取り掛かる。流石に立ち振る舞いは8歳以上でも、中身は普通の子供とは変わらず、大好きなものを出されれば気合が入るサリー様。ネファリス様は私に感謝の眼差しを向け、サリー様の勉強に取り掛かった。ネファリス様とは、数日しか会っていないけど話を交わすくらいには親しくなった。そして、いつもその話題はフレイアル殿下になっている。相手が一方的にフレイアル殿下の話をするのだが、そこに何の目的があるのかしら。

「シタリス様も、フレイアル殿下のお手伝いをされてはいかがでしょうか」

私はのんびりと椅子に座り、お茶を飲むシタリス様に向かって言う。フレイアル殿下は誰もいない執務室で仕事をするのに疲れたのか、最近は何故かサリー様の部屋に大量の書類を持ってきて仕事をしている。先程の五月蠅い中で、仕事ができるのもすごいと思うが。

「兄上は自分でやってこそ意味があるって言ってるからいいんだよ」絶対に言っていないと思う。だってフレイアル殿下頭を抱えてらっしゃるし。シタリス様はそんなことを気にしないようにお茶を飲む。この人は本当に王子なのだろうかと内心思ってしまうのは無理ないだろう。

「そうですか」

私はそう言っただけで自分の仕事に取り掛かる。思っただけで表には出さない。出してはいけない。仕事はもう慣れたのだけど…流石に一人でやるのは疲れる。サリー様のお部屋には部屋付きの侍女が私はいない。理由を聞くと、扱いが難しすぎて皆嫌がるそうだ。慣れたら結構、いい子なんだけどね。

「エルー!!」

「なんでしょか」

「エルーは大事な人はいるの?」

サリー様から問われた質問に私は固まる。いきなりなんの質問をしてくるかと思えば、大事な人はいるかという。私は、いつもどおり

の笑でサリー様に問い返す。

「なぜそのような質問を？」

「えっと、その…ね？エルーみたいなお姉様がいたらいいなーって」

もじもじ言うサリー様は本当にそう思っているらしい。私は一瞬、本音を言いそうになるが、それをグツと抑えて笑顔で言う。

「そうでございますか。私には大事な人はいません」

私が言うとサリー様は喜んだ。けど、ゴメンなさい。私、誰とも一緒にいる気ないの。私はサリー様の姉にはなれない。私はそんな思いでサリー様の後ろ姿を見ていた。その、無邪気に笑うサリー様は、いつかの私のような笑顔だった。

当の昔に無くした、無邪気な私の笑顔のような。

6話 「なぜそのような質問を？」（後書き）

今回はエルシアの過去がちらっと見えました。

エルシアの過去には一体何が！？

次回は、そんなエルシアの過去を書きます！！

## 7話 過去

あるところに、それはそれは、よく笑う可愛い女の子がおりました。その女の子は、周りの子とは少し違っていました。

その女の子は、国で一番えらい女の子だったのです。

しかし、女の子はまだ幼くて、そんな事は分かっていませんでした。

女の子はすすくと育ちました。

素直な性格、誰もが魅了される顔立ち、そして、悪を知らない純粋な心。

誰もが、そんな女の子を大好きでした。

女の子は、8歳の誕生日をむかえます。

しかしその誕生日は、悲しい日になってしまいました。

女の子の住んでいる国には、揉めている国がありました。  
隣国です。

女の子の住んでいる国は、緑が豊かで、自然に恵まれていました。  
隣国は、自ら領土にある自然を伐採してしまいました。

そして、燃料が少なくなつて困つた隣国は、女の子の国に攻め込み、  
我が物としよう。  
そう考えました。

勿論、女の子の父である国王様は、何とか戦をしないように隣国と交渉しました。

しかし、隣国の王様は、それはそれは、欲張りな人間でした。  
女の子のお父さんが出した条件を飲み込まず、ついには女の子の国

に攻め込んできたのです。

それが女の子の誕生日。

しかし、悪夢はまだ終わりません。

街が火の海となっていく中、女の子のお父さんとお母さんは自分達の子供だけは逃がそう。

そう思いました。

女の子には3人の兄がいました。

一番目は18歳。二番目は14歳。三番目は12歳。

女の子は3人の兄達にとっても懐いていました。

女の子の両親は、そんな兄達に女の子を任しました。

両親にとって女の子は、女の子の一族の唯一の希望だったからです。

女の子の兄達も、その事を分かっていました。

しかし、男の子といってもまだ子供。

そんな4人に隣国は容赦しませんでした。

はじめが一番上の兄が。次は二番目の兄が隣国の兵に立ち向かっていきます。

最後に残ったのは、女の子と三番目の兄だけでした。

「大丈夫。大丈夫だよ…」

三番目の兄は、呪文のようにその言葉を呟きました。  
何度も何度も。

しかし、神様は意地悪でした。



女の子の目の前に兵士が立ち塞がります。

三番目の兄は、女の子を守るように兵士に向かって剣を構えました。そして、三番目の兄は女の子に向かって言います。

「エルシア！！振り返らずに走れ！必ず、後で俺が探し出すから！」

兄はそう言うのと女の子に一つ、ロケットペンダントを渡しました。それは、女の子の誕生日プレゼントにと家族全員で女の子のために選んだ物でした。

女の子はそれを受け取ると走ります。

兄の言いつけ通り、暗闇の中、一度も振り返らず、一度も鳴き声を上げず、静かに泣きながら。

どれほど時間が経ったでしょう。

森を突き抜け、一つの村が見えてきた時、女の子は足の力が抜けていくのを感じます。

けれど、女の子は体中の力を足に集め、地面を蹴り、村の中へ駆け込みます。

村の中は賑やかで、楽しそうです。

女の子は村に入った途端、崩れ落ちました。体力の限界でした。

最後の力を振り絞り、どうしたのかと聞いてくる村人に女の子は言います。

「助けてください」

と。

やがて女の子はその村の男女に引き取られました。

その男女はそれから数日後、少し離れた王国、ミフェス王国のファスに移り住みました。

女の子は一人で暮らせる年になるまでその男女に引き取られていましたが、自分が誰か。

どこから来たのかなど、一切話しませんでした。

そんな女の子に不安を抱きながらも育ててくれた男女。

女の子は大変感謝しました。

女の子が12歳になると、女の子は家を出ます。

しかし、男女はそんな女の子を温かい目で見送りました。

「また戻っておいで」

と言いながら。

やがて女の子は、少女へと成長し、人生で久しぶりの友人ができました。

アイサ・カルーラ。友人の名です。

明るくて、お姉さんぽい彼女に少女は兄達を重ねたのかもしれない。

8歳の時のことが原因で、少女は王族が嫌いです。

そしてなにより、面倒事を嫌うようになりました。

平和が一番。少女はそう言います。

少女の胸元には、それはそれは綺麗なロケットペンダントが光っています。

少女はそのロケットペンダントを肌身離さず持っています。

いつの日か兄が自分の事を見つけてくれると願い、その印を光らせているのです。

そのロケットペンダントの中には家族の写真が入っていて、開けたところにはこう書いてあります。

『エルシア誕生日おめでとう。あなたの傍にはいつでも私達がついています』

と。

こうしてエルシア・サマーニから、無邪気な笑顔が、純粹な心が、人を愛するという感情が、誰かに甘えるという感情がなくなりました。

それでも未だ彼女は、家族の帰りを待っているのです。

戦後、女の子の国の隣国の中にはある噂が流れました。

自然の国、エール国が滅んだ。しかし、エール国の生き残りがいる。

という噂が。

## 7話 過去（後書き）

エルシアの過去が分かりました。

何か楽しくもないし、シリアスにもかけてない感じがする…

ま、まあ過去がわかったということだ！！

次回はまだ考えてないので…

頑張って考えます！！

読んでいただいてありがとうございます！！

8話 「お勉強はされないのですか？」（前書き）

遅くなりました!!

短いです、どうぞ

## 8話 「お勉強はされないのですか？」

サリー様は未だ、はしゃいでます。ここらへんは子供らしいなと思う。でもね…？

「サリー様！お勉強をしてくださいませ！」

「ちよつとネファリー！いい気分なの！邪魔しないで！」

「サリー様…」

必死に勉強するように説得するネファリス様のお姿が、虚しいわ…先程から、喜んで勉強が手につかないサリー様。それを叱るネファリス様。その様子を苦笑しながら見ているフレイアル殿下とシタリス様。私はというと、その光景を眺めながら侍女の仕事をしている。

「エルシアさん！」

「…どうして私を呼ぶのでしょうか？ネファリス様」

諦めたかと思いきや、私を呼んだネファリス様は何故か私の手を取って助けを求めてきた。

「エルシアさんが言っただけだと思っただけです！お願いします！」

「…あの、結果は一緒になると思うのですが」

「大丈夫です！エルシアさんなら！」

…私はどれだけ期待されているのかしら。無駄だと思っただけど…私はネファリス様の勢いに押され、サリー様の元に向かう。サリー様は鼻歌を歌って踊っている。…それだけ嬉しいのかしら。

「サリー様」

「何かしら！エルー！」

嬉しそうに振り向いたサリー様に、私は言う。

「お勉強はされないのですか？」

「…しなきゃいけない？」

しょんぼりしているサリー様。そこで私は思った。サリー様はお勉強が好きではないのだと。まあそうでしょう。この年頃ならば外で走り回りたいのでしょうね。私は暫く考えて言った。

「お勉強が終わりでしたら、菓子を食べてからお城を探検いたしましょう」

「本当！」

「ええ。本当でございます」

「約束よエルー！さあネファリー！さつさと終わらすわよ！！」

簡単に食いついたサリー様。…わかりやすいわね。私は苦笑して元の位置に戻る。すれ違う時、ネファリス様にお礼を言われたが、微かに寒気がしたのはなんだったんだろ…？私は首を傾げながらサリー様が必死に勉強する姿を眺めていた。

侍女の仕事が全て終わり、家に帰った私は久しぶりにゆっくりした。サリー様が寝るまでが侍女の仕事で、それまで帰ってはいけない。普通は侍女塔つてところで寝るんだけど私は侍女塔が苦手で…仕事に遅れないならいいと、許可を取って自分の家に帰っている。



「つつかれたー…」

私はベッドに身を投げ出す。柔らかくなく少し硬いベッド。私の胸元で金色のロケットペンダントが跳ねた。私が唯一、常に身につけている物。まあいわゆる形見つて奴かな。私はそれを手に持ち眺めた。勿論中の絵を。

「兄様達、今頃、どんな大人になってたのかなあ…」

私の呟きは暗い静かな部屋に消えていく。誰にも届くことなく、静かに。後、数日が経てば、あの日がやってくる。私にとって最悪な一日が。この国に来てから、私は自分の情報を探れないようにブロックしてきた。自分が母国の生き残りだと悟られないよう、ブロックしてきた。

この世界には『魔法』がある。しかしそれは限られた一部の人間しか使えない。だから一般人の私は使えない事になっている。使えるのは、先代から魔法を引き継いでいる人間、魔法師の卵。魔法師。それに表立って魔法が使えると公表していない者。私は表立って公表していない者の類に入る。情報をブロックしたのだって、そういう為にある魔法。自分の魔力の存在を消す魔法だってある。

私の家系はご先祖様から魔法が使える。兄様達も使えるし、勿論、お母様達だって使える。私と兄様達は魔法を使える者同士の間に生まれた子供。つまり、使えない者と使える者の間に生まれた子より、力が強いらしい。だから大抵の魔法は使える。私の場合はもっと他の魔法も使えるんだけど。まあそれは置いといて。

「寝ようかしら」

明日はいつもより早く城へ出向かないといけない。何やら他国の国王が直々に挨拶に来るだとか。だから早く寝ないと、遅れるかもしれない。

「あ。アイサに言うの忘れてた…ま、いいや」

私はそう言ってベッドに潜った。やがて、瞼が重たくなり、私は襲ってくる睡魔へと意識をゆだねた。

8話 「お勉強はされないのですか？」（後書き）

やっと…やっと出てきました魔法設定！！！！

いや、特に表立って出るかわからないんですけど、でも魔法設定を出せて嬉しいです！！

では、読んでいただいております……！！！！

9話 「申し訳ありません。記憶にございません」(前書き)

今回のエルシア、機嫌悪いです。

9話 「申し訳ありません。記憶にございません」

どうして、私の周りには面倒事が降り注いでくるのかしら。嫌がらせですか？神様。今日は朝早く城に出た私。そんな私は意味がわからない光景を目にした。

「どうして皆様、正装ではないのですか」

王族は基本、他国の王族や行事などがある場合は正装を着るのが常識。なのにこの方たちといえば、普段と同じ格好をしている。しかもフレイアル殿下まで。

「今日は正装でなくていいのよ。他国の国王様がそうおっしゃったとお父様が言ったもの」

「…そうでございますか」

私は腑に落ちないような顔を隠して笑顔で言った。他国の国王はそれほど変わり者なのだろうか。

「他国の国王様は何か探し物をなさってるようですね。私もお手伝いできないかしら」

「どうぞでしょう。お手伝いできたらいいですね」

サリー様はそう言うのと昨日と同じようにはしゃいでいる。私は皆様にお茶を出したりして侍女の仕事をやっていた。そして他国の国王が来るという知らせの鐘が鳴り、私達は急いで城の門の前に集まった。私はサリー様の部屋付きなので、サリー様の後ろに控える。そして鐘が三回鳴った。他国の国王が来たのだろう。私達、侍女は全員体を折り曲げる。王族のサリー様は他国の国王が来たら正式な礼

をする。侍女達は他国の王族がすぎるまで顔を上げてはいけない。それが決まりだ。

「お会いできて光栄です。サリーナ・ジェーンと申します」

「こちらこそ会えて嬉しいよ。小さなお姫様」

会話が交わされる中、私は少し顔を歪めた。小さなお姫様って。暫くしてまた三回の鐘が鳴る。他国の国王が城にはいられた。そういう知らせだ。私は顔を上げて、小さく悲鳴を上げた。誰だっであけるわ！行ったと思った人が間近に居たら！！他国の国王は私を見ていった。

「エルシアかな？」

私は驚いた。というか、知らない人間が、いきなり自分の名前を呼んだらびっくりするに決まってる。私は驚きを表に出さずに言った。

「そうですか」

私が言うのと目の前の人間はにこりと笑った。違う。この人は国王じゃない。改めて周りを確認すると、違う場所にこちらを見ている中年男性を発見した。じゃあ、この人は？

「僕はサフィア・バージル。覚えてない？」

サフィア・バージル…？私は記憶を探り、出た結論は。

「申し訳ありません。記憶にございません」

いや正直あった。それらしき名前の人に昔あったことある気がした。

が、今、そんな事を言ったらまた面倒なことに巻き込まれるに違いない。じゃあ隠していよう。そういう結論にたどり着いた。まあ会った事ある気がしただけで、本当に会ったかは覚えてないんだけど。

「そうなの？…残念。それじゃあサリーナちゃん、エルシア、また会おう」

そう言っただけでその人は城の中に消えた。サリー様は驚いて声が出ないらしく、私の顔を凝視していた。それは他の皆も同じで、唯一、ネファリス様だけは興味深そうな顔をしていた。

「エルシアちゃん。さっきの人知り合い？」

「知り合いじゃありません。何回言ったら分かっていたただけなんですか」

私は少し怒り気味で言った。この会話、さっきから何回目。しかも相手がその度に違う。ネファリス様から始まり、フレイアル殿下、サリー様、侍女さん達、侍女頭、女官頭、騎士、国王様、王妃様、そしてシタリス様。というか、国王様と王妃様が来た時は正直焦った。嫌という感情が表に出てないかとか、なんで来るんだとか。で、最後のシタリス様は困った顔で聞いてくるからまた頭に来て。冷静でよかった。

「一国の王子が話しかけたからビックリして…」

「私も驚きました」

安心したように言った言葉に私は言った。私だって驚いた。そして

ム力ついた。サリー様はさっきから落ち着きがない。フレイアル殿下も。というか、皆ソワソワしている。それがまた、イライラするといつかなんといつか…

「え、エルー。そろそろ王子様はお話し終わったかしら」  
「どうでしょうね」

サリー様があの方を相当気に入ったのか王子様と呼ぶようになった。王子様って…まあそういう年頃なのかもしれないわね。

「サリー様、少し落ち着いてください」  
「そ、そうね。落ち着きましょう」

そう言つて深呼吸するサリー様。と、フレイアル殿下。フレイアル殿下には行つてませんけど。と、思ったらシタリス様も深呼吸をしていた。…もう勝手にやってください。私がそんなことを思っていると、部屋の中にノック音が響いた。その音でサリー様が少し固まった。私は扉の前へ行き、開ける。するとそこにはサフィア・バージル様が立ってた。

「や。お邪魔しても？」  
「どうぞ」

私は脇に退いて、道を開けた。

「サリーナちゃん、フレイアル殿下、シタリス君。待ったかな？」  
「いえ、大丈夫です。お座りください」

サリー様が言うとバージル様はニコリと微笑んで座った。その前にはサリー様、フレイアル殿下、シタリス様。そしてその後ろにネフ



アリス様が立っていて、私はお茶をいれている。そのお茶を出して、扉の傍へ立つと、直立不動。指示があるまで動かない。

「この度はお越しいただきありがとうございます」

そう言つてフレイアル殿下が挨拶をすると、ほかの三人も頭を下げた。そんな四人を前ににバージル様は困つたような声を出した。

「頭上げて。僕、そんなに改まるの好きじゃないんだ。だから敬語もなしでお願いしたいんだけど」

「…そちらがいいのなら」

「うん。じゃあそうして。僕の事はサフィアでいいよ」

その瞬間、サリー様の顔が輝いた。

「サフィア様はエルーと知り合いなんですか!？」

「え」

え、ちょ、何で私が出てくるのよ。私が戸惑つてるとバージル様は言つた。

「うん。エルシアは覚えてないみたいだけど。子供の頃から知ってるよ」

「子供の頃のエルー!!どんな感じですか?」

「そうだねえ。可愛かったよ。なにをやるのも素直で」

「お二人とも」

「なあに?」

「他人の事を喋らず、ご自身の事をお話なさってください」

私はそう言つた。あまり、自分の事を人にばらされるのは良く思わ

ない。良く思う人なんているのかどうかもわからない。そんな雰囲気を感じ取ったのか、お二人ともその話題ではなく自分たちの話題に切り替えた。

9話 「申し訳ありません。記憶にございません」(後書き)

うん。

やっぱりエルシアは面倒ごとに巻き込まれますね( ; ^ ^ )

締りのない終わり方になりましたが…

次回、頑張ります

10話 「……………出ます」(前書き)

今回おちなし、中途半端で長いです。

10話 「……………出ます」

夜。他国の王族を歓迎する、盛大なパーティーが開かれた。それはもう、私にとって地獄のパーティーでしかない。そして私は油断していた。侍女として、パーティーに参加するのだと。なのに…

「どうして私が！」

「エルシアちゃんもリストに入ってるんだってば」

「リストから消せばいいじゃないですか！」

「無理なんだって」

「大丈夫です！私がネファリス様に言ってきます！！！」

何故か私はリストに入っていて、侍女ではなく、国民として参加させられることになった。今回のパーティーを管理しているのはネファリス様なのでネファリス様に掛け合えば！！

「ネファリーが楽しそうにリストに入れてたんだけど？」

もうやだ。

「…意地でも出ません」

「そう言われても…」

そう言っただけで苦笑するシタリス様は、何かを思いついたように言った。

「アイサちゃんも来るよ？」

「アイサと私は別です」

「美味しい食事もいっぱい出るよ？」

「……………出ます」

結局、食べ物に負けた。…いや、城に出る食べ物はやっぱり美味しいのよ。私が言うのとシタリス様はニコツと笑い、部屋を出ていった。私が今いるのはサリー様の部屋。今サリー様は、お着替え中である。暫くしてシタリス様が真っ赤なドレスを持って来た。そして満面の笑みで私に言った。

「こんなドレスでどう?」

「拒否します」

「どうして!？」

物凄い驚いた顔をしているシタリス様。え?何?私の返事に何か問題でも?

「私は派手な色が嫌いです」

「じゃあピンクとか?」

「…シタリス様の派手の基準はどうなっているのですか?普通、若草色とか、黄緑とかでしょう」

私が言うのとシタリス様は不思議そうな顔をした。…ものすごく頭にくるんですけど。そりゃ、シタリス様からすれば地味で、眼中になかったかもしれないけど、私にとったら一番落ち着く色なのよ。私が顔をしかめるとシタリス様は苦笑して言った。

「せめて青とか…」

「…水色なら」

私がそう言うのとシタリス様は楽しそうに部屋を出ていく。それとすれ違いに、サリー様がそれはそれは可愛い格好で走ってきた。

「エルー！どうかしら！」

そう言ってくるりと一回転するサリー様。サリー様はピンクのフリフリのドレスを来て、髪に綺麗な髪飾りをつけている。私はニコリと笑っていった。

「よくお似合いですよ」

「本当？よかった。エルーもパーティーに出るんでしょ？」

「…はい。出ますよ」

「じゃあ、サファイア様と踊れるわね！」

サリー様は何を期待なさっているのか、ワクワクしている。まあ踊れるよ。絶対に令嬢様達に睨まれるでしょうけど。その後、何故かこちらにもワクワクしながらドレスを持ってきたシタリス様に、何故かワクワクしている侍女さん達に私は飾られた。そして数分後。

「まあ！よくお似合いですわー！」

「みちがえりましたわねえ」

「はあ…」

何故か褒められた私は何を思ったかというところ…全体的に重いわ！何か、ネックレスやら、髪飾りやら、ブレスレットやら…元々つけていたものを合わせると凄く重い。この場で数個外したいんだけど侍女さん達が怖いので、また後でにする。侍女さん達は何を思ったのか、香水を持ち出してきた。

「え？」

「これもつけないと」

「そうよね」

「いや、あの、香水は止めてください」

それから少し、私と侍女さんの攻防戦が続く。が、最終的には付けられた。もう嫌だ。私の体の周りに匂いが充満している。その匂いが爽やかな匂いだった事が唯一の救いね。どうしてパーティー前に疲れたのかしら。意味がわからないわ。私がサリー様の部屋を開けようとすると、中がやけに騒がしい。不思議に思っただけを開けるとそこには国王様と王妃様がいた。…もう何でもありだわ。

「おおエルシアか。入れ入れ」

「エルーちゃんじゃない！あらー可愛くなったものねえ」

「国王様に王妃様…」

今私の前にいる国王様と王妃様が世間に衝撃を与えたお方。それは凄い身分差婚で、ラブラブっぷりが半端ないのだとか。まあ今も手を繋いでらっしゃるのだけど、せめて子供の前では控えて欲しいと思うのは私だけかしら。

「…お父様とお母様はなかがよくてこまります」

国王様と王妃様を見てそういうサリー様は苦笑していた。8歳にここまで言われてそれでもイチャイチャする親って…私は苦笑してから言った。

「国王様に王妃様。そろそろパーティーが始まるのではないですか？」

「あら？もうそんな時間かしら」

「もうそんな時間か？」

「…もうそんな時間ですよお母様、お父様」

子供に呆れられながら注意される親ってどうなのだろうか…



「はあ……」

「溜息つちゃダメよ。エルー」

私が溜息をつくと隣で声を潜めてアイサにそう言われる。私だって溜息なんてついちゃいけないって分かってるのよ。ええ。分かっているわ。けどね。

「この状態で溜息をつくなというの？」

「…無理ね」

何故か先程から令嬢達に嫌味をグチグチ言われていたら溜息もつきたくなるでしょう！苦笑するアイサはさっきから令嬢達を見てビクビクしている。前に言ったと思うのだけど、アイサは令嬢達が苦手なのよ。私だって苦手。けど、部類が違うの。私は面倒だから関わりたくないだけ。アイサはこういう嫌味を言われるから怖い。という風に、私は怖くはない。アイサは怖い。さっきからアイサの顔が引き攣っている。

「あら、庶民の小娘が頑張ったわねえ」

「そうね。目立ちもしないのを頑張って着飾ったものだわ」

おほほと口元に手を当て上品かもわからないように笑う令嬢達に私はうんざりといった感じで答える。

「すみません。他国の国王様が来ていると知り、気合が入りすぎてしまいましたわ。そちらは私達に言うだけあって綺麗なお姿をしておりますわね。元々の顔がわからないくらいですわ」

にこつと笑って私は言う。すると令嬢達の顔が笑顔で引き攣った。アイサは慌てた様子で私を見ている。何を言っているかという、厚化粧ですわねと言っている。そして香水くさい。鼻が痛いくらいに。

「あ、あなた何を言っているのかしら？」

「私は褒めただけですが？どう聞こえたのでしょうか？」

「…いい、いいわ。ご機嫌よう」

そう言って去る令嬢達に心の中で思う。弱いなーと。令嬢達は迫力はあるものの、何故か私の返しに簡単に負けるので面白くない。退屈だ。

「流石エルーだわ。また丸め込んだのね」

「弱すぎる。全然楽しくないわ」

「それにしても、どうしてこんなに沢山の令嬢様達が私達に話しかけてくるのかしら」

そう、それなのよね。この前のパーティーでは話しかけてすらなかった。なのにどうして、今日に限ってこんなにも嫌味を言われるのかしら。そしてその会話の全部に着飾って、という単語が入っている。そりゃ今回はシタリス様から貸していただいた城のドレスだから質がいいし、色もきれい。でもそれだけでしよう？どうして…私が先程までの令嬢達の嫌味を思い返していると一つ引っ掛かった。

「…アイサ。原因が分かったわ」

「え？うそ。何？」

「行けばわかるわ」

私はそう言って一步踏み出す。アイサもその後慌てた様子で続き、私達は歩き出す。会場の中央部へ。私達二人が中央部へたどり着くと、嫌味の原因達が雑談していた。

「あ！エルーじゃない！」

「エルシアちゃん！来てくれたんだね！」

「やあエルシア。楽しんでいるかい？」

私達二人を笑顔でむかえるお三方。その他にもフレイアル殿下にネファリス様、後知らない人がその三人を保護者的な目で見ていた。いや、二人というべきだ。一人は私の後ろに熱い視線を送り、その送られた方も熱い視線を返している。

「…アイサちよつと」

私はアイサに振り向いて小声で話す。

「あなたの恋人って城で働いてるってどうして言わなかったの」

「え？あ、だっていう必要ないかなって」

「…いや、あるでしょう」

私はそう言って溜息をついた。どうやらアイサの恋人は城で働いてる人だそうだ。…ああ鬱陶しい。その熱い視線が。そのやり取りほかの場所でやってくれないかしら。

「…エルー。思っていることがおもいつきり顔に出てるんだけど」

「じゃあちよつとは自重しなさい」

「…はい」

熱い視線はなくなったものの、じっとお互いを見つめ合っているア

イサ達。…それって自重しているってなるのかしら。私は小さく溜息をつき、知らない人に向かって挨拶をする。

「初めまして。アイサの友人のエルシア・サマーニと申します。以後お見知りおきを」

「初めまして。フレイアル殿下の護衛と共に騎士団長を勤めているフィリイ・ジャーヴァスでアイサの恋人。よろしく」

「…恋人と発言する時に赤面するの止めてください。アイサも」

私がぼそつと言うと二人は固まって顔を真っ赤にし、俯いた。その動作が面白くて、私は声を殺して笑った。正直、アイサの恋人が騎士団長だったとは驚いたけど、アイサにお似合いの人だったので安心した。

「それよりエルー！どうして私の所に一番に来てくれないの？」

「そうだよ！僕達待ってたんだからね！」

「エルシアの事だから来ようなんて思ってたんじゃないでしょ？」

「…だからってこんなややこしい事しないでください」

ややこしい事。それは、このお三方が私の特徴やら、何かを言っただけで令嬢達に嫌味を言わせ、どうしてだろうと私が疑い、そして私が何とかしてココにたどり着くという事だ。…本当にややこしいやり方で呼んでくれたわ。おかげで訳の分からない嫌味を言われてアイサが怖がったじゃない。

私はネファリス様の前に立つと挨拶をする。今日の目的というか、今の目的は令嬢達に言われた嫌味のストレスをこの方にぶつける事だから。元々この方がいけないのよ。

「お久しぶりですわね。ネファリス様。今回はパーティーにお招き

いただき《・・・・・・・・》ありがとうございます」

私はニコつと笑う。

「いえいえ。エルシアさんにはいつもお世話になっていますからお気に召して頂けましたか？」

同じくニコツと笑って私に言うネファリス様。私はそれに笑顔で答えた。

「ええとても。お食事は大変美味しいですし、元気のいいご令嬢様達もお話していただきましたから。私が気に食わないのは、どうしてあなたの手にそれ《・・・・》があるのでしょう？」

私はそう言つてニコつと笑うのを更に深くする。ネファリス様の体がびくつと震え、手に握っているものにより一層力を込める。

「もう一度聞きます。どうしてあなたの手にそれ《・・・・》があるのでしょう？」

「…あなたを世話した侍女から受け取りました。忘れ物、だと」「そうですか。それはありがとうございます。では、返していただけますね？」

私がそう言つとネファリス様はこくりと頷き、右手を前に出してきた。私は右手の下に両手をだし、それを受け取る。次に開いた時にはいつも身につけているハズの物があつた。私は自分がそれをどんな表情で見ていたかは知らない。私が顔を上げると、皆が固まっていた。

「…あの？」

「え？あ、ああ。何かな？」

「どうかしましたか？何か失礼なことをしましたでしょうか？」

「別に、なんでもないよ？うん、なんでもない」

ネファリス様はそう言ってニコツと微笑む。私は不思議に思いながらも、そこまで気にしてはいなかったのでネファリス様に挨拶をしてその場を去った。と言っても、用がなくなったので先程居た位置に戻るだけ。

「エルー」

「ん？何？アイサはいいの？あそこにいなくて」

「うん。それよりそれって…大切な人に貰ったもののなの？」

私がロケットペンダントを首につけると、アイサが遠慮がちに聞いてきた。私は微笑んで頷く。

「そうなんだ…」

アイサはそれ以上黙って何も聞いてこなかった。

10話 「……………出ます」(後書き)

続くと思います!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3942z/>

---

面倒事に巻き込まれた！！

2012年1月5日21時51分発行